



帰敬式でお剃刀を当てられる、新門様

く別院だよりく

モダン寺新聞

第30号

発行所

浄土真宗本願寺派 本願寺神戸別院
〒650-0011
神戸市中央区下山手通八丁目一番一号
TEL 078-341-5949

専如新門さま神戸別院ご巡拝

六月十七日、神戸の地に専如新門さまのご巡回・ご巡拝が実現しました。

親鸞聖人七百五十回大遠忌法要のお待ち受け機運の高揚と、ご法要の円成を期してのことで、現在本願寺築地別院の副住職として多忙を極める中でのご巡拝に、参列者からは多くの歓迎のことが寄せられました。

ご巡拝には、新裏方さまもご同行されており、ご巡回・ご巡拝当日には、僧侶・門信徒で別院本堂が満堂となりました。

このご勝縁にあわせて帰敬式も行なわれ、八十四名の門信徒の方々が、新門さまよりお剃刀を頂戴し、浄土真宗門徒としての新しい第一歩を踏み出されました。

午後からは、記念式典が行なわれ、新門さま・新裏方さまのご焼香の後、讃仏偈をお勤めしました。

式典において、新門さまはお言葉の中で「近年、浄土真宗のみ教えが伝わりにくくなっている、と言われています。様々な社会状況の変化によって、今までであれば家庭の中で代々伝わってきた宗教・習慣・文化といったものが伝わらなくなっている、という現状があります。

特に、若い方の中には、お寺というものは年を取ってからお参りすれば

良い、お墓やお葬式の時だけお寺にお願いすれば良い、という風に考える方が沢山おられます。

さらに近年、関東を中心とした都市部では、お墓や葬儀であっても僧侶やお寺は必要ない、という風に考える方が急速に増えています。

このままでは近い将来、社会の中でお寺や僧侶の役割というものが、全く無い、必要とされない、そういう社会になってもおかしくありません。

しかし、浄土真宗のみ教えというのは、今私達がこの『いのち』をどの様に生きていけばよいのかを教えています。

み教えを聞いて生きる人生と、そうではない人生とでは、大きな違いがあります。

今日お集まりいただきました皆様方には、浄土真宗のみ教えを心の依りどころとして生活されますとともに、ご縁ある方々にお寺にお参りし、み教えを聞くことを、お勧めいただきたいと思ひます。

今日の日をご縁として、浄土真宗のみ教えが、益々伝わりますように、皆様と共につとめてまいりたいと思ひます」と述べられました。

式典の後には、記念の集いが開催され、『大遠忌法要の円成に向けて』とい



懇談会にて、ハイチーズ！

うテーマで協議会が開かれました。

参加した僧侶・門信徒からは、自分達のお寺の現状、また、行なっている活動や、教区を中心として行なっている、七百五十回大遠忌に向けての取り組みの内容の報告などがなされました。

特に、次世代へお念仏を伝えるために、幼少年への日校や、キッズサンガなどの取り組みの必要性、また、開かれたお寺をめざしての対社会へ向けた活動などが出されました。

そうした意見をふまえて、これから宗門の将来を見据えた話し合いが行なわれ、新門さまと僧侶・門信徒との貴重な意見交換の場となりました。記念式典・集いの後は、会場を神戸

メリケンパークオリエンタルホテルに移して、懇談会となりました。

新門さまは、神戸にはよく来たので、とても親しみのあること、今回の巡拝を行う中で、多くの方とお出会いし、七百五十回大遠忌を力強くお迎えできることを挨拶で述べられました。

新門さま・新裏方さまは、どなたとも気さくにお話なされ、一緒に記念の写真にお写りになられることも。

和やかな雰囲気の中、懇談会は進み、最後は新門さまご一行を、拍手でお見送りしました。

別院仏教婦人会の森タミ子さんは「新門さまは一度築地別院でお見かけしたことはありませんが、こんなにお近くでお会いできるとは思いませんでした。」

新門さま・新裏方さまともにお優しい方で、懇談会では一緒に写真に写って下さり、とても嬉しかったです。

七百五十回大遠忌のご法要をお迎えしますが、本当に心強い気持ちになりました。これからが楽しみです。一生の思い出になりました。」と話されました。

新門さまご巡回・ご巡拝を終え、参加者一同、七百五十回大遠忌法要のお待ち受け機運がより一層高まったことでした。

着工の槌音響く!! ―待たれる完成―

この度、宗祖親鸞聖人、七百五十回大遠忌のご勝縁に併せて行なわれる、『本願寺神戸別院整備工事』が着工しました。

本工事では、別院北側境内地に、新たな時代を担う僧侶の育成を目的とした、寺院子弟育成施設が建設されます。

また、かねてより要望のありました新規納骨所の増設工事も行われます。

さらに、一階ロビーの拡張工事並びに別院前庭の整備も行われ、大人から子どもまで、更なる親しみ易いお寺となるよう設計されています。

工事に先立ち行なわれた起工式では、輪番が「お寺の工事というのは、一にかかって寺方の都合を更に優先して、ご門徒方・参拝者方にいかにすれば阿弥陀さまのお法（みのり）・教えが伝えられるか、伝え易いようにするか、ということが工事を致します一番底にあるものでございます。

従いまして、完成を致しました暁には、ご門徒の人々に、参拝の方々に、これほどのものが出来たので、皆でこの阿弥陀様の教えを、さらにさらに聴聞していこうではありませんか、と



工事が進む北側境内地

いう思いでございます。

それぞれがその役割を存分に発揮して頂いて、我々の願っておりますような工事の完成を、ぜひともぜひともお願いをする次第でございます。」と述べました。

竣工まで約一年という大工事となりますが、落成の暁には、神戸別院のご門徒をはじめとし、納骨堂のご縁を結ばさせていただいた方、別院の近隣にお住まいの方々など、多くの有縁の方々にとって、心のふるさと、安らぎの場として活用されるお寺となるように精励する次第であります。

その実現のたに何卒、皆様のご協賛ご協力を賜りたく、伏してお願ひ申し上げます。

モダン寺物知り手帳 ―須弥壇(しゅみだん)―

須弥壇とは、仏教寺院の本堂ないし諸堂の正面に据えて、その上にご本尊を安置する壇のことです。

他宗では、壇上に直接ご本尊を安置する場合と、厨子や宮殿(モダン寺新聞28号参照)を置いて、その中にご本尊を安置する場合があります。

真宗の寺院では、須弥壇の上に宮殿を置き、阿弥陀様をご安置致します。

須弥壇という呼び名は、古代インドの宇宙観(バラモン教・ジャイナ教・仏教等)の中で、宇宙の中心をなす巨大な山『スメール山(Sumeru)』音訳：須弥山(しゅみせん) 意訳：妙高山(みようこうせん)』に由来し、その須弥山をかたどった壇ということで須弥壇と呼ばれています。

さてモダン寺の須弥壇は、お釈迦様が初めてお悟りの内容を説かれたという仏教の聖地、インドはサルナートの鹿野苑(ミガダーヤ)の仏教遺跡を模して造られています。

鹿野苑より出土した遺跡の紋様や傍らにそびえ立つダメークの塔に残る唐草模様などが、モダン寺の須弥壇の

モチーフとなったのでしよう。

サルナートはインド北中部、ガンジス河の中流に面した都市ワラーナシー(ベナレス)の郊外より、北へ約10kmの地にあります。

7世紀にこの地を訪れた玄奘三蔵の『大唐西域記』によると『サルナート』の名は、鹿にまつわるジャータカ物語、『鹿の王』の伝説に由来するそうです。

昔々：サルナート一帯は、もとより鹿が多く住む平穏な土地でありました。

しかし、その国の王は鹿狩りが大好きであり、鹿の群れはいつも危険に晒され、鹿の数も段々と減っていききました。

その事に心を痛めていた鹿の王は、鹿狩りを止めない国王の前に進み出て、

「毎日二頭の鹿を生贄として届けますので、鹿狩りを止めて下さい。そうすれば王様には新鮮な料理が続き、私



モダン寺の須弥壇

たちは命を延ばすことができます。」と懇願しました。

国王はその案を受け入れることにしました。

ある時、生贄の順番が、子を身ごもった雌鹿に回ってきました。

雌鹿は、「死ぬ順番は私に回ってきましたが、お腹の子は順番には当たっておりません。」と鹿の王に申し出ました。

雌鹿の気持ちを察した鹿の王は、

「母の心とは、なんと悲しく、慈しみ深いものであろうか：私がお前に代わろう。」と言い、自らが代わりとなって国王の所へ行きました。

鹿の王がやって来たことに驚いた国王は、「なぜ突然に、鹿の王が来たのか!？」と問いました。

鹿の王は、「雌鹿が死ぬ番になりましたが、お腹の子はまだ産まれておりません。この理不尽を知ってなとお耐え忍ぶことができず、我が身をもつて代わることとしました」と答えました。

この言葉を聞いた国王は、

「私の心はあさましい野獣のような心だ！それに対して汝は鹿の身でありながら、本当の人間の心をもっている」と言い、自らの行為を深く恥じ、直ちに鹿の殺生を止め、その一帯を鹿の樂園として保護しました。

この慈悲のある鹿の王こそ、お釈迦様の前世の姿でありました…。

鹿野苑の名はここより起こり、現在のサルナートの呼称は、『鹿の王』を意味する『サランガ・ナター』の訛ったもの、だと伝えられています。

この鹿野苑にて、初めてお釈迦様はお悟りの内容を、コンダンニヤ、アッサジ、ヴァッパ、マハーナーマ、バッディヤといった五人の比丘(修行僧)にお説きになられました(初転法輪)。

これにより、最初の弟子が生まれ、仏(目覚めた者・真理を悟ったもの)ブツダ(法(真理・仏の説く教え)ダルマ)僧(仏のみ教えによつて生きる者達の和やかな集い)サンガ)の三宝がそろい、ここに仏教教団が成立したのです。

お釈迦様最初のお説法の地、鹿野苑：モダン寺の須弥壇は、まさに、仏様のみ教えを聴聞させていただく『聞法の道場』として出発した、浄土真宗のお寺に相応しい造りの須弥壇となっているのではないのでしょうか。

須弥壇の美しい造形を見ると、そのモチーフとなった初転法輪の地サルナート・鹿野苑の伝説を心に思い描くとともに、止まることなく転がり続ける車輪の如く、私達に伝えられてきたみ教えの説かんとするところに、耳を傾けてみませんか？

別院大遠忌法要 日程決まる

京都の本願寺では、ご修復を終えたご影堂において、平成二十三年四月より『親鸞聖人七百五十回大遠忌法要』がお勤めされます。

神戸別院におきましても、本願寺での法要の前年である、平成二十二年に「兵庫教区・神戸別院親鸞聖人七百五十回大遠忌法要」を実施する決定が成されています。

教区代表者との打合せを重ねる



JRからも見える新しい懸垂幕

中で、この度神戸別院での法要の期日が

『平成二十二年九月三十日』

『十月八日』

の九日間に決定しました。(※期間の中間日、十月四日は休息日)

また、この度の大遠忌法要における兵庫教区・神戸別院のキャッチフレーズも、

『今、大切なことばがある』

に決定し、キャッチフレーズの書かれた懸垂幕が、別院の正面に掲げられました。

私にとって大切なことばとは何であるのか…。

そのことばを考える事によって、私が今本当に大切にしていくなきこと、肝要としていくものは一体何であるのだろうか？という事を考えていただくきっかけともraitたい。

その上で、浄土真宗の教えの中で頂いていく、自分にとって大切なことばとは何であるのか？

そのことばは私にとって、また私の『いのち』にとってどのような意味合いがあるのか？どのような事実を持つていくのであろうか、というこ

とを伝えていきたい…。

大遠忌法要を盛大に修行することはもちろんですが、この法要が機縁となつて、現代社会に應える宗門を築き、次代に教えを伝えていく「人材」を育てていく。

さらに、親鸞聖人のみ教えにご縁がなかった方々に、み教えを伝えていき、浄土真宗の教えが次代に受け継がれるべきものであるとの意識を、最高潮に高めていきたいものと考えております。

その遂行のために、門信徒の皆様をはじめとして、多くの方々の強いお力添えを幾重にもお願い申し上げます。

仏様の前で

『お寺』と言えば、お葬式・法事をするところ。悲しみを縁として、ご法縁を頂くところ、という印象をお持ちの方が多いのではないでしょうか？

しかし、お寺は私の一生、生・老・病・死の人生を通して仏様のご縁・み教えを頂く場所です。

尊いご縁によつて恵まれた新しい『いのち』をお祝いし、感謝する初参式。一人前の大人に成人したことをお祝いし、大人としての自覚を促す成人式など…。



職員の岡橋大誠さんが結婚致しました

お寺は、私達が成長していく過程において大きな区切りや、よろこび事の時、仏様の前でそれをお祝いし、お誓いする大切な儀式の場でもあります。

結婚式

この度、別院職員の岡橋大誠さんがモダン寺で結婚式を挙げられました。「本堂での式は、とても厳かな雰囲気、とても感動しました」とのことでした。

モダン寺では、結婚されるお二人が永遠の契りを阿弥陀様に誓い、より莊嚴に深い縁とするために、本堂を式場として結婚式を行います。

皆さんも、仏様の御前で、結婚の契りを交わしてみたいかがでしょうか？

お問い合わせは、神戸別院結婚式係りまで。